WSF Japan 「第1回女性スポーツフォーラム」報告

「勉強会を開いてほしい」「情報交換の場を設けてほしい」という会員の声に応えて、事業委員会が2年がかりで準備してきた「女性スポーツフォーラム」が、いよいよ今年度から始まりました。3カ月に1回、開催していきます。

この「女性スポーツフォーラム」は、女性スポーツに関わる様々な分野の方をお招きし、皆で一緒に勉強していこうということで、事業委員会（委員長＝中村久子）が企画し、実施にこぎつけました。毎回、このページで「フォーラム」の要約を載せていきます。なお、当日の録音テープをご希望の方は事務局にお申し込みください。

◇

第1回女性スポーツフォーラム「女性スポーツの味方です――男性指導者はこう思う」▽講師＝伊勢丹女子アイスホッケーチーム監督　齋藤寛さん、全日本柔道連盟女子強化部長　中村良三さん（91年4月26日、渋谷区立勤労福祉会館）

齋藤寛さん　伊勢丹入社後、選手を経て男子アイスホッケーチーム学卒。56歳。

伊勢丹では30年以上前からスケート部がありました。もちろん女子部員もいましたが、年々数は減少していました。1973年のことですが、社員対象に毎年開催しているスケート教室で、男子の隣でアイスホッケーのスティックを見よう見まねで振り回している女性たちがいました。女子のアイスホッケーチームを指導しようと思ったのはこの時です。数カ月してオリンピック出場経験者を含む満州医大OBチームとの初の対外試合をしたのですが、私はこの時をチーム結成と考えています。

翌年の6月に国土計画でも女子アイスホッケーチームができ、秋から定期戦が始まりました。それからは日本各地でチームが作られ、年々盛んになってきました。現在は全国に34チームあります。

しかしチームを作って3年たった頃、「女子チームはやめるべきだ」という声が周囲の人間から出てきました。選手たちがうまくなってくるに従って、ケガが増えてきたからです。それも全て顔のケガです。当時は男性同様、ゴールキーパーを除くと顔に防具をつけてはいけないことになっていました。そこでフェイスマスクを作り、ケガの予防に取り組みました。もしアイスホッケーが女性にむかないスポーツならば、このあたりで、自然に廃れていったのではないでしょうか。

当時は女子アイスホッケーといってもなかなか理解してもらえず、全国大会を開催しようと日本アイスホッケー連盟に協力を求めたのですが、よい返事は得られませんでした。それではと、独自で開催までこぎつけ、第4回まで頑張りました。その後、連盟に加盟が認められ、国際大会への出場もできるようになりました。昨年の第1回世界選手権（カナダ・オタワ）には日本チームも参加しました。外国チームのレベルは高く、伊勢丹がカナダのブリティッシュコロンビア大学のチームを招聘し、初めて外国選手と試合をした時、日本選手は技術、体力ともほとんど歯がたちませんでした。この時、世界のレベルの高さを知り、もっと海外に目を向けなければと痛感しました。

今後、女子アイスホッケーの振興に取り組むにあたっては選手のボディーチェック（肉弾戦）のあり方や、それに伴う防具の改良、特に軽くて丈夫なものを開発していくことが課題だと思います。

中村良三さん　学生時代から全日本柔道選手権などに出場。現在、筑波大学助教授。5年前、柔道部総監督に就任。昨年の北京アジア大会、先のバルセロナの世界選手権では全日本女子チーム監督を務める。東京教育大学卒。48歳。

現在、全日本柔道連盟の女子強化部長として、選手の競技力向上に関わっています。また、大学では柔道部の監督をやり、同時に一般学生の柔道の授業も受け持っています。最近は学生数が男女、半々くらいになりました。女子学生で柔道を第1希望の種目として選んでいるのは、このうちの4分の1

くらい。第2希望で入ってくる学生も多くなりました。

柔道というと、日本古来のもの、封建的、男性中心というイメージがあるようです。現在、全日本柔道連盟の各委員会でも、女性の委員がいるのは強化委員会だけで、審判委員会、国際委員会など他の委員会には1人もいません。現在の様な社会状況の中で、他の競技連盟と比べても、やはり少し遅れているのではないかと思います。

女子選手の強化について述べますと、これまでは町の道場で1対1の指導を受けるのが中心でした。たいてい高校や大学の年齢になると道場を離れるようになり、男子の場合は学校の柔道部に入って続けるのですが、女子は学校に女子柔道部がないのでやめてしまうことになります。最近は大学の柔道部はもちろん、各企業や警察などでも女子柔道の強化に力を入れはじめたので、競技年齢はだいぶあがってきました。イメージ的にも変わってきました。山口香選手のようにそれほど体が大きくない選手が世界チャンピオンになったり、女子柔道をテーマにしたアニメが放映されたりしていることが大きく影響していると思います。

世界に目を向けてみると、柔道は欧州では男女とも、とても盛んです。日本では嘉納治五郎が良家の子女も指導していたという事実はありますが、女子競技としては海外での歴史の方が古く、20年ほど前から欧州選手権や米国選手権などが開かれています。そういう国々から是非、女子の世界選手権を開催したいという要求があり、1980年、ニューヨークで第1回女子世界選手権が開かれました。国際大会には日本は後から加わったという形です。この大会で日本は2位と3位の成績を収めましたが、全体的なレベルはまだまだ低いものでした。

柔道は身長や、足の速さなどに関係なく、だれでも自分に合ったレベルでできるスポーツですから、競技人口もさらに増えていくと思います。選手強化の、今後の課題の一つとしては、ケガの予防があげられます。柔道は特に、耳がカリフラワーの様につぶれてしまうことがあります。男子なら〝勲章〟で済んでも、女の子はそうはいきません。耳のカバーを工夫することなど、積極的に取り組む必要があると思っています。

△第2回「女性スポーツフォーラム」のお知らせ▽日時＝9月12日午後7時～8時半▽場所＝東京芸術劇場会議室▽講師＝ジャパン・レディース・ボウリング・クラブ代表須田開代子さん▽テーマ「私とボウリング――JLBC15周年を迎えて」須田さんは女子プロボウラー第1号で、テレビの解説などでも活躍中です。詳細は改めてご連絡します。